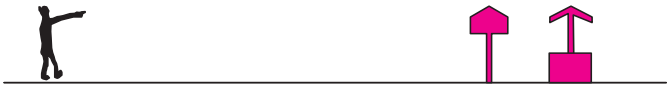
０５．屋根をかける



ここでは屋根をかける習慣を取りあげる。屋根がわざわざかけられたり、屋根型のつくりを物の頂部に取り付ける対象は大きく分けて、宗教施設にある物とそうでない物に分けられる。

宗教施設にある物は、『江戸名所図会』で確認できた物で、絵馬がかけられている塀、手水場、提灯立て、権現造などの社自体にかける屋根、灯籠、外部に置かれている大きな香炉、鐘楼、湧き水が発生している場所、地蔵、奉納のお酒が飾られている場所などであった。

それ以外の屋根がかけられていた対象は、『江戸名所図会』で確認できた物で、高札、店の看板、屋敷の門や塀、籠。木戸の柱、茶弁当、井戸、船などがあった。

この事から、屋根をかける対象は多くが神聖な物や格の高い物だが、機能的理由から屋根をかけているであろう物も多く存在する。つまり屋根は聖的な属性を強調こそすれ、規定はしない。

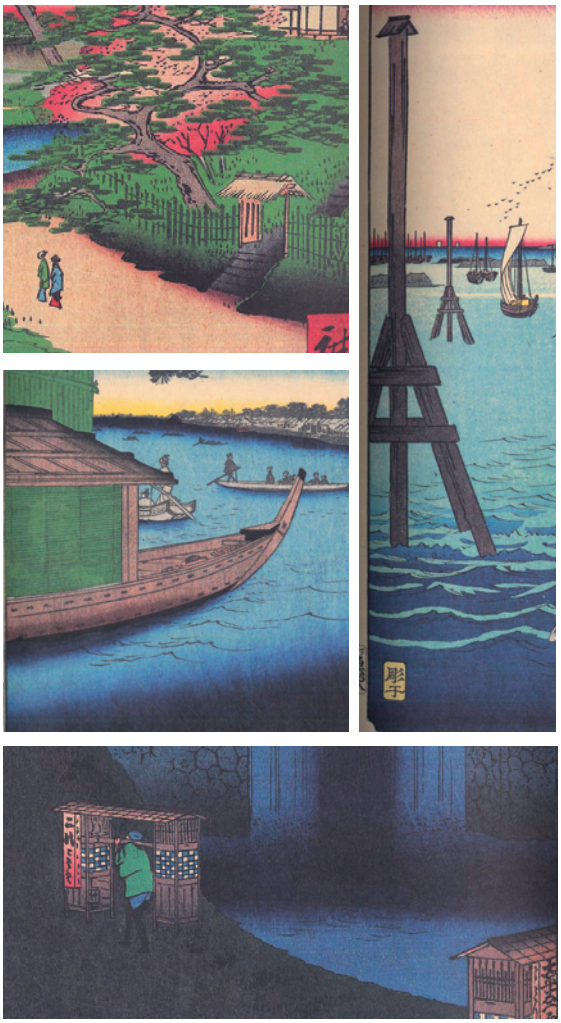


fig-4-2-13　屋根のかけられた物
『名所江戸百景』 広重　より

fig-4-2-14「江都歓進大相撲浮絵之図」 春章
『大江戸ものしり図鑑』より

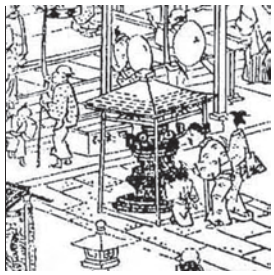
絵馬置き

手水場

提灯立て

社

灯籠


香炉

鐘楼

権現造

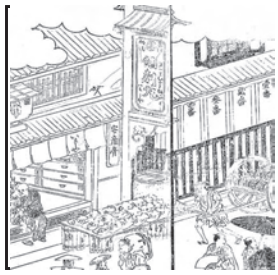
湧き水が発生している場所

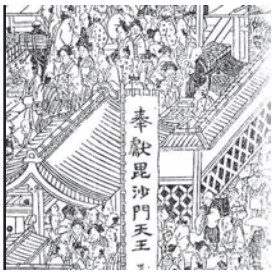
地蔵

奉納のお酒

宗教施設

高札

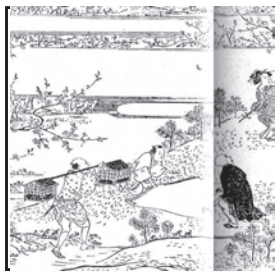

店の看板



門、塀

籠

木戸の柱


茶弁当

井戸

船

宗教施設以外

０６．目上にあげる

身分が高い物と低い者を相対的に高低差を作る空間儀礼が江戸では徹底されていた。『江戸名所図会』で確認できるその対象は、武士や高札など幕府に関係する物と、社や仏などの彫刻物があり、後者の多くは台座を建設して目上にあげている。

このような作法は身分が高ければその差も大きく広げるといった物ではなく、相対的に差があれば良い物である。

床の間はこのような作法の代表的な物であろうが、床の間と通常の座の高低差はわずかなものである。また、『家庭の祭祀事典』(*28)によると神棚は「清浄な、明るい、気持ちのよい、日常の拝礼．奉仕が充分にできる場所」に設置するのが好ましく、高すぎると清掃が不十分になると言う。また、一般的に神棚は最上階に祀るが、そうでない場合の慣習として、天井に「天」もしくは「雲」と書かれた紙を貼って、その下に設置する。この事からも「高すぎない」神棚の性質がわかる。

西牟田 崇生 ： 家庭の祭祀事典―神棚と敬神行事，国書刊行会，2005 v

fig-4-2-15　神棚
wikipedia より

fig-4-2-16　床の間
wikipedia より

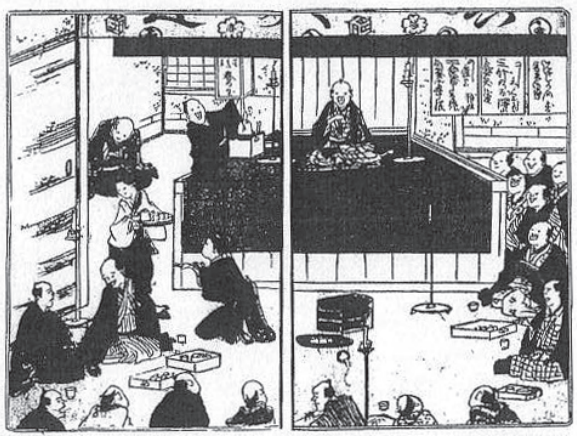


fig-4-2-17　寄席の高座は、仏教の僧の講座が語源となっている　「春色三題噺」『大江戸ものしり図鑑』より

高札

不明

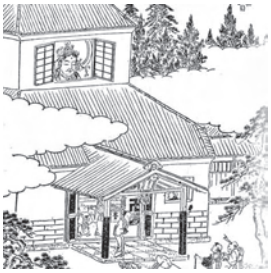
馬に乗る武士

槍

幕府

地形を利用した社

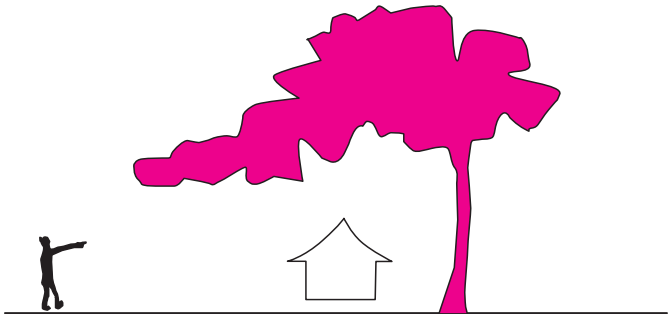
石を積んで高くした社



彫刻物

宗教関係

０７．秘める

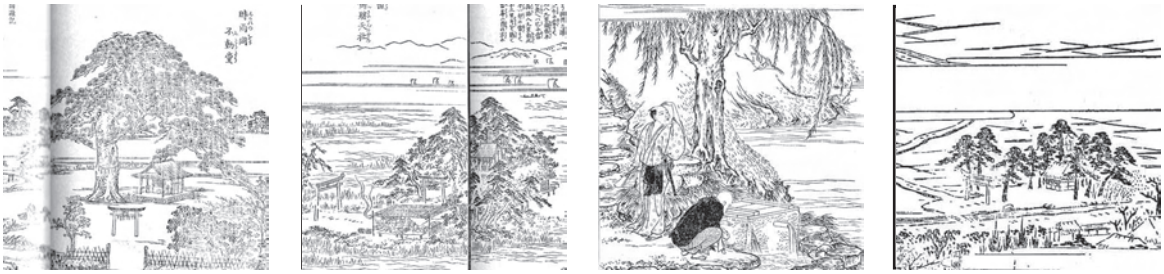


日本の宗教施設が秘められる傾向にある事は１章で述べた。ここでは秘める形態として具体的に「樹木で覆う」「建物で囲む」「地形に埋める」「樹木で遮る」の四項目挙げる。

「樹木で覆う」は本社の背面に高木を配したり、樹木の幹の下に本社を潜り込ませる形態である。このような形態は『江戸名所図会』で多く確認できる。
「建物で囲む」は、石塔や小さな社、柵のようなもので本社を取り囲む形態である。
「地形に埋める」は、岩壁などを削ってそこに地蔵や小さな社などを埋め込むような形態である。
「樹木で遮る」は、建物の正面の宗教的軸線に樹木が配され遮る形態である。

このようなものはどれも対象を下降させる性質を持っていると言えるであろう。樹木が垂直ではなく水平に張り出すものが多く好まれるという事はこの事を良く示している。

fig-4-2-18　秘める形態の樹木
『名所江戸百景』広重　より



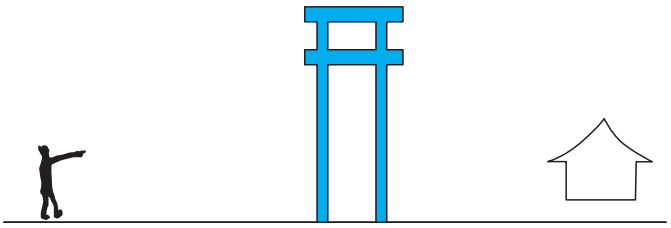
樹木で覆う

建物を囲む

地形に埋める

樹木で遮る

０８．境界を作る



江戸では鳥居やしめ縄、門、のれんなど多くの境界がある固有の高さをもって存在している。橋や階段、段差など、高さ自体が境界の役割を果たすものもある。

これらの境界の多くは暗示的である。社会的慣習によって成立している建前的な薄い境界が多い。門や社の直前に鳥居がたっているという奇妙な構図は、暗示する必要のある意味が複数必要であったために生じたものであろう。

また、しめ縄による境界は以下にみるように様々な対象があるが、どれも聖性をもったものである事が図版から分かる。また、それらは対象物に対応して縄の高さが上下する。よって歩行を直接的に遮る物ではない事が予想される。つまりしめ縄の高さに対する客体は人間ではなく聖なるものなのであり、それは聖域の内側から発生しているのである。

fig-4-2-19　新製錦手猪口 潜戸　二代歌川豊国
『浮世絵の歴史』より

fig-4-1-2-20 滝の結界
『名所江戸百景』広重　より

「まちの表層」　；　大野秀敏，『見えがくれする都市』，

屋敷の門

寺の門前の段差

宗教施設の階段１

宗教施設の階段２

のれん１

のれん２

橋

様々な場所に境界を作る

鳥居＋門　１

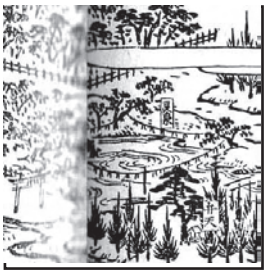
鳥居＋門　２

鳥居＋社

２重の境界

社とその周辺

泉１

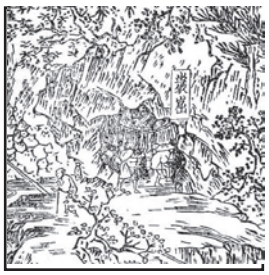

泉２

泉３

伽藍１

田んぼ

伽藍

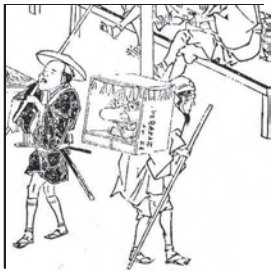

洞窟

滝１

樹木

不明

滝２


天狗の面

滝３

灯籠

伽藍２

石

炎

伽藍３

しめ縄による結界

０９．変化に富む

大名行列の際かかげる槍や、火事場で火消しが自分の組が存在する事を表象するために掲げる纏、その他花火、凧、梯子乗りなど、仮設的な物を多様に彩る。

槍は色や形だけでなく、材質の好みを繁栄させた物も存在する。

纏は当時いろは４８組にちなんで４８本あり、各組の火事場での標として、形態はそれぞれ縁起をかけたり文字をもじった形となっている。

梯子乗りはそもそも火消しが江戸の町で火事を即興で確認するための技術である。これが発展して正月の出所式などで様々な型を全身で演ずるものとなった。

fig-4-2-21 供槍
『武者たちが通る-行列絵図の世界-』より

fig-4-2-22「戸田忠恕　公行列絵巻」
『武者たちが通る-行列絵図の世界-』より

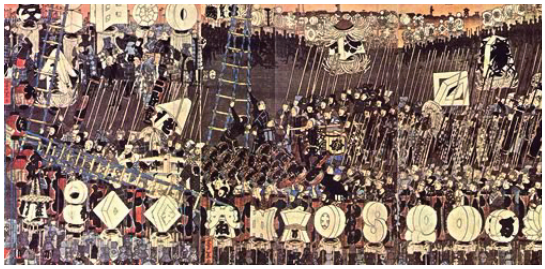


fig-4-2-23「江戸の花子供遊」 月岡芳年
鳶頭政五郎覚書　　消防防災博物館より

fig-4-2-24 梯子乗り
鳶頭政五郎覚書　　消防防災博物館より

消防防災博物館　：　鳶頭政五郎覚書　http://www.bousaihaku.com/cgi-bin/hp/index.cgi

提灯

槍

凧

花火